

長野県植物研究者伝 7

田中 貢一 抄伝

丸 山 利 雄

T. Maruyama: Biography of Mr. Koichi Tanaka

長野県出身の植物研究者で、その青年時代、特に師範学校の生徒としての在学中に非常な努力で、県内の植物を研究して特異な存在であったのは、田中貢一氏(1881~1965)である。

その履歴並びに活動の概要は、次の通りである。

1881(明治14)年 東筑摩郡広丘村(現塩尻市)に生れる。幼時から花を愛し、自然を楽しむ念が極めて深かったという。

1899(明治32)年 18才、長野県師範学校に入学。

1900(明治33)年 19才、長野県師範学校に矢沢米三郎氏(本誌12号参照)が博物科担任の教諭として来任、その指導をうける。

9月戸隠山で新植物を採集。この植物は1902年牧野富太郎氏によって、*Viola yazawana* Makino ヒメスミレサイシンと命名された。

1901(明治34)年 20才、戸隠山で新植物を採集、牧野富太郎氏によって*Draba sinanensis* Makino ミヤマナズナと命名された。後この植物は *Draba sakuraii* Makino と同一物とわかり、現在はトガクシナズナとっている。

1902(明治35)年 21才、5月11日同輩富岡氏と雪の日に戸隠大洞沢にトガクシショウマ(トガクシソウ)を採集し、それを鉢植えとして栽培し、5月23日長野県師範学校に行啓の皇太子殿下のご覧に入れ、東宮御所に献上した。

5月24日芋井村荒安(現長野市)でスミレの1種を採集し、牧野氏によって *Viola variegata* Fisch. var. *nipponica* Makino ゲンジスミレと命名された。

翌5月25日、戸隠山でキバナノアツモリソウを採集した。

8月には、ハケ岳でミヤマツメクサを発見、牧野氏によって *Alsine macrocarpa* Makino と命名されたが、現在は *Minuartia macrocarpa* Ostenf. var. *jooi* Hara と改められている。

なおこの年6月、師範学校博物教室で信濃博物学会が結成され、発起人代表は矢沢米三郎教諭であり、役員として幹事長は矢沢教諭であり、生徒(4年生)の田中も幹事として役員に加わり、機関誌「信濃博物学雑誌」の編集主任となっている。「信濃博物学雑誌」は年5回発行の予定であり、8月15日第1号

を発行し、1903(明治36)年10月発行の第7号まで田中が編集を行っている。

また、この年12月までに翌年(1903)発行予定の自著「信濃の花」の原稿も仕上げています。

1902年中に信濃博物学雑誌中に発表した田中の研究は、次のようなものである。

1号(8月15日発行)、トガクシショウマについての研究。

2号(10月15日発行) 信州特有植物 ヒメスミレサイシン、ハケ岳植物採集記。

3号(12月15日発行) 信州特有植物 ハゴロモソウ。

11月、従来日本では北海道だけにしか分布の知られていないスギナモを上高井郡日野村(現須坂市)で採集。

1903(明治36)年 22才、長野県師範学校卒業。

4月、古牧小学校(現長野市)訓導となる。

8月「信濃の花」を長野市荻原朝陽館より発行。その内容は、次のようなものである。

トガクシソウ・ヒメスミレサイシン・ゲンジスミレ・信濃に産するスミレ・キバナノアツモリソウ・信濃に産する *Cypripedium* の種類・ハクセンナズナ・ウルップソウ・チョウノスケソウ・オサバグサ・クモマグサ・シコタンソウ・シャクソウ・リンネソウ・ハゴロモソウ・ヤチスギラン。

これらの植物の形態、産状、分類、発見史等について解説し、写真や原色図版も添えられている。

この年また東京の博文館よりは「花物語」の著書も発行している。

また、この年、白馬岳と鑓ヶ岳で3種の新しい植物を採集している。それはシロウマナズナとクモマキンボウゲとクモイハタザオである。

シロウマナズナは、牧野氏によってその和名と *Braba shiroumana* Makino の学名がつけられている。

クモマキンボウゲは、牧野氏によって *Ranunculus tanakae* Makino の学名と前掲の和名とがつけられたが、のちヨーロッパやアジアや北米に分布する *Ranunculus pygmaeus* Wahlenb. であることが明らかになった。

らかになった。

クモイハタザオは、牧野氏によって *Arabis tanakana* Makino と名づけられたが、和名は現在クモイナズナと改められている。

またこの年に発行された信濃博物学雑誌には、次のような研究を発表している。

4号(4月25日発行) *Potentilla matsukana* Makino (ユキバキンバイ) について。

この植物は、田中の先輩松岡(後に岡田と改姓)邦松氏が1902年8月20日戸隠山で採集したもので、現在はウラボシキンバイと呼ばれているものである。

5号(5月25日発行) ゲンジスミレの研究。

6号(7月15日発行) ミヤマナズナ (*Draba sinanensis* Makino) について。

7号(10月25日発行) クモマキンボウゲ (*Ranunculus tanakae* Makino) について。

8号(12月25日発行) 白馬岳・鉛ヶ岳における植物分布の状態。

1904(明治37)年 23才、3月古牧小学校を退職して、4月牧野富太郎氏のあつ旋によって東京駒場の農科大学の助手として池野成一郎教授のもとで勤務する。

1912(明治45)年 31才、農科大学辞職。

1913(大正2)年 32才、合資会社帝國駒場農園を設立し、その技術長として農産物種子の検査、苗木の育成販売、特に全国小学校の学校園植物の普及の事業を行う。

1916(大正5)年 35才、この年より8年間、牧野富太郎氏の日本植物図鑑(大正14年発行)編集の

仕事に協力する。

1928(昭和3)年 47才、「科属検索日本植物志」を牧野富太郎氏と共著。この稿のために約4,000の植物説明図を用意したが1923(大正12)年の大震災で罹災し、全部を失ってしまったので、その後の図212をこの書にのせている。

1944(昭和19)年 63才、戦争のため郷里に疎開。

1965(昭和40)年 84才、郷里において死亡。

氏は師範学校生徒の頃、島崎藤村と交際があり、その著「信濃の花」には当時島崎藤村から送られた西詩9編のうち4編をおさめている。

藤村の作品「破戒」の人物土屋銀之助は氏をモデルにしたものだといわれている。

土屋は瀬川丑松と師範学校時代から同窓の友であったこと、植物採集に興味をもっていたこと、農科大学助手として上京すること、などでよく氏の行動と一致する記述が「破戒」の中に見られる。

参考文献

田中貢一氏夫人田中小夏様の手紙。

田中貢一著 信濃の花(明治36年刊)

信濃博物学雑誌(1~23号)(明治35~40年刊)

牧野富太郎著 日本植物図鑑(大正14年刊)

牧野富太郎・根本莞爾共著 日本植物総覧(昭和6年刊)

牧野富太郎・田中貢一共編 科属検索日本植物志(昭和3年刊)

信州自治 第28巻10号 『田中貢一著「信濃の花」』

大井次三郎著 日本植物誌(昭和53年刊)

牧野富太郎先生を偲びて

正 宗 厳 敬

つれづれなるままに、冬の一、本棚の整理をしていたところ、牧野先生から小生に宛てた古い封筒が見つかった。中味がないのが残念であるが、先生一流の正確な楷書で、墨で丁寧に小生の住所が書かれており、大正二年十月二日と年月日が記されている。又先生の住所は本郷西片町十番地はの五号となっている。先生は恐らく、郵便物が正確に配達されるのと、これを扱かう人に迷惑が掛からないようにとの御考えになって、このように何時も御書きになったのではないかと私は考える。というのは手紙などの宛名は必ず楷書でかいておられたのでもわかる。

私が先生から御手紙を戴いたのは恐らく、この手紙が最初であったのではないと思われる。肝心の内容がないのでわからないが、大正二年というとき私が十四才の時だからまだ小学校にいた時で、牧野先生に植物の鑑定を御願ひした時の御返事ではなかったかと考える。この頃は今のような牧野植物図鑑といった、便利な本もなく、植物を調べることが極めて困難であったので、私はまだ子供であったが、手紙を出して牧野先生に教えを乞うたのであった。先生はこの小供の私の御願ひをこころよく聴いて下さったことであった。